

歴史動画⑦文化史 I

飛鳥寺

<http://gyao.yahoo.co.jp/player/00473/v09834/v0982700000000541243/>

四天王寺

<http://gyao.yahoo.co.jp/player/00473/v09833/v0982700000000541236/>

法隆寺

<http://gyao.yahoo.co.jp/player/00473/v09834/v0982700000000541241/>

平城京

<http://gyao.yahoo.co.jp/player/00473/v09834/v0982700000000541146/>

東大寺

<http://gyao.yahoo.co.jp/player/00473/v09834/v0982700000000541135/>

お水取り

http://cgi2.nhk.or.jp/archives/michi/cgi/detail.cgi?dasID=D0004500344_00000

薬師寺

[http://cgi2.nhk.or.jp/archives/michi/detail.cgi?dasID=D0004500149_00000](http://cgi2.nhk.or.jp/archives/michi/cgi/detail.cgi?dasID=D0004500149_00000)

http://cgi2.nhk.or.jp/archives/michi/detail.cgi?dasID=D0004500148_00000

阿修羅

[http://cgi2.nhk.or.jp/archives/michi/detail.cgi?dasID=D0004500419_00000](http://cgi2.nhk.or.jp/archives/michi/cgi/detail.cgi?dasID=D0004500419_00000)

春日大社

[http://cgi2.nhk.or.jp/archives/michi/detail.cgi?dasID=D0004500422_00000](http://cgi2.nhk.or.jp/archives/michi/cgi/detail.cgi?dasID=D0004500422_00000)

万葉集

http://www.youtube.com/watch?v=MwT_nv_mBuMh0

渡来人

5世紀に倭の五王が中国に相次いで朝貢したといいますが、五王とは、おそらくは五代に渡る大王（天皇）と考えられます。また「朝貢」とは、中国の皇帝を「親分」として認め、自国を下位に置くことで、自国が必要とする物品や技術を取り入れると同時に、中国皇帝の武力を背景に周辺国からの侵略を抑えるという前近代の東亜世界における世界秩序のことです。当時世界最先端の文明国であり、19世紀までその力を維持し続けた中国は早くから漢字を使用していました。その文明をいち早く取り入れた百済の王仁が日本に「論語」「千字文」を伝えたといいますが、私の通う書道教室では、今なお「千字文」をお手本として稽古します。彼のように朝鮮半島や中国大陸から先進文明を携えて倭に来た人々を渡来人とよびますが、古墳時代から奈良時代までの文化の中心にいたのがほかでもない彼らなのです。

教科書には出てきませんが、私の故郷出雲も渡来人のもたらした文明の跡が色濃く残ります。



↑製鉄・植林の神を祭る韓甕神社（出雲市）

砂鉄がとれた出雲では古代の大陸渡来の製鉄法（たたら製鉄）により薪として大量の木が切られたため、植林法も半島が伝わったわけですが、この製鉄と植林

の神々をまつる神社、韓竈神社が島根半島の山の中でひっそり守られています。

飛鳥

関西以外の地区に住んでいるとピンとこないかもしれませんが、飛鳥は奈良市内から近鉄線でしばらく行った平野地帯で、別の町村です。この町に行くと明らかに奈良市内とは異なることを感じます。ここのあたりを「まほろば線」が走っていますが、まさに日本のまほろば（最も良い場所/発祥の地）を思わせる土地です。奈良市内の壮麗な建築物や仏像とは異なり、飛鳥は地味です。しかし出雲や日向と同様、中国の文明が来る以前の日本の姿があちこちで感じられるという意味で、中国式の大都市、奈良とは一線を画します。この地が都に定められたので飛鳥時代と呼ばれます。

この時代でもっとも有名な人物というと聖徳太子でしょう。彼は日本を独立国にした人物でもあります。彼が遣隋使に持たせた国書の「日出處天子致書(ひいづるところのてんしよをひぼつす)日没處(るところのてんし)天子(にいたす)」という部分に関し、煬帝はこの「天子」に怒ります。「天子」とは天命を受けて世界を統治することを許された、世界で一人の存在なのに、「太陽の出る国」の「天子」とはありえないことなのです。5世紀には倭の五王が中国に朝貢していましたが、聖徳太子はここで中国に対して「独立宣言」をするわけですね。

また太子の建てた法隆寺は私に言わせれば万博会場並みのグローバルな環境です。左右非対称の日本式の伽藍に、百済

人の末裔、鞍作鳥が北魏様式の仏像を造ったり、インド風の壁画を描いたり、ギリシャ風の柱を置いたり、極めてグローバルであることがこの寺の特徴です。

仏教文化の変遷 就職活動→新入社員→係長→転職の過程

飛鳥時代の仏教文化が、たとえるなら就職活動で初めてスーツを着た学生のような「着慣れなさ」のようなものを感じるのに比べ、白鳳時代のものは「新入社員」になったように感じます。つまり大陸の先進文明に接したばかりのころは、日本土着の文化に大陸文明を接ぎ木したようで、言うならばネクタイの締め方がいまいきまっていない学生っぽさのようなものを感じます。飛鳥大仏や法隆寺百済観音など、痩せぎすな仏像の顔や、法隆寺の左右非対称の伽藍にそれが現れています。



↑日本最古の仏像飛鳥大仏（奈良県明日香村）

大化の改新後の白鳳時代は「新入社員」期といましたが、ようやく大陸文明をそっくりそのまま受けたようで、言うならば入社した会社のスタンダードなマニュアルによる新人研修を素直に受けたような感じがします。山田寺仏頭や薬師寺

薬師三尊像、聖観音像など、全体的に「アンパンマン」のようなふっくらした顔や、左右に塔を配した双塔式伽藍などが、薬師寺で見られますが、これらも当時大陸でスタンダードだった美意識なのです。

ちなみに薬師寺東塔の先端に水煙という装飾がありますが、その透かし彫りによる天女の舞はまるで白鳳時代の音楽が聞こえてきそうなので、明治時代にこれをみた米国の美術家フェノロサは「凍れる音楽」、すなわち白鳳時代の音楽が瞬間冷凍されて今も見ることができるという名言を残しました。東京ですと上野にある東京芸大の芸術情報センターではこの水煙のレプリカがみられます。

さて、仏像も奈良時代の天平文化になると、大陸文化が板についてきて、一体これは日本文化なのか中国文化なのか区別がつかなくなりますし、技法が多様化したために様々なタイプの仏像が現れます。言うならば入社以降十年ぐらいたって色々な仕事ができるようになり、係長クラスになったとでもいいでしょうか。東大寺大仏など、当時の技術の粋を集めた巨大なものもあれば、赤や緑、金色などのきらびやかな色が残る、三月堂執金剛神像といった仏法の守護神としての威圧感を感じさせるもの、興福寺の阿修羅や唐招提寺の鑑真和上像などのように悩みを秘めた人間そのものといったものもあります。

昔話ですが、個人的に中学校の修学旅行で見学し、持って帰りたいたいほどに感銘を受けたのが阿修羅像でした。なんとじじくさい少年だったのだらうとつくづく思いますが、後に「持って帰れるのでは」

と思った14歳の私の直感が、ある根拠に基づいていることが分かりました。これは乾漆像といって、中が空洞で周りが布を巻きつけて漆を塗っただけだから軽く、寺が災難に遭う度にお坊さんたちが担いで逃げたというのです。

さらに平安時代の桓武天皇の時代になると、密教美術が流れ込みます。これはそれまでの大陸文化とはかなり異色です。いうならば係長職を辞して転職した、というような感じでしょうか。東寺の不動明王などはそれまでの仏像の持つ崇高さや悩み、威圧感などよりも、まずはおどろおどろしい「不気味さ」が目立ちます。刀をもっているからというのがありますが、背景には炎がめらめらと燃え上がっているのが不気味さを増します。それまでの大陸文化とはかなり異なることがわかるでしょう。

これらを完全に消化した後に、この後の国風時代の仏像に移るわけです。

和歌と出雲

「八雲立つ 出雲八重垣 妻ごめに
八重垣作る その八重垣を」



↑最初の和歌の歌碑（島根県雲南市須我神社）

これは古代出雲の國を治めたスサノオが宮殿を造った時に詠んだという、日本最古の和歌です。私がこの歌を学校で習ったのは小学四年生だったと思います。

大和政権ができる前に、おそらく倭の国々で相当大きな勢力をふるったであろう出雲國で生まれた私は、保育園のころから古事記をテーマにした演劇や紙芝居に親しんできました。それもそのはず、「古事記」の舞台の三分の一が出雲だからです。「古事記」「日本書紀」のような中央政権が書いたものとは異なり、「出雲國風土記」には出雲独自の見解で「日本史」が書かれています。例えば出雲が大和に政権を明け渡す「國譲り」という物語にしても、大和側の見解では出雲は出雲を含めた全領土に対する行政権を放棄したことになっていますが、出雲側の見解では出雲を除いた領土を大和に割譲することになっています。現代風に言うならば千島列島に関して日本は北方四島を除いた領有権を放棄したといいますが、ロシアは北方四島を含めた領有権を放棄した、と言っているような感じでしょうか。古代の領有権に関してなんとなくすっきりしない土地で生まれ育ったので、1700年ぐらい前のことでもまるで戦時中の話をするかのように語り継がれています。

そしてその論拠となるもののひとつが60カ国余りの風土記の中で唯一完全な形で現存する「出雲國風土記」です。現物を出雲大社隣の古代出雲歴史博物館で実物を見ましたが、故郷の歴史が漢文、すなわち古代中国語で書かれていて、それを家内が現代中国語で朗読しているのも不思議な感じがしました。ちなみにこの出雲國風土記のすごさは、「この滝から何m東に行くと岩がある」と書いてあるので行ってみたら、本当にあったりする

のです。風土記の正確さと出雲の発展の停滞を同時に感じざるを得ませんでした。

さて、出雲で始まった（ことになっている）和歌ですが、本格的な歌集としては四千あまりの歌がおさめられている

「万葉集」に始まります。これには天皇から名もない防人、つまり九州防衛軍の兵隊たちのものまで収められています。なんと民主的な、と思うのは私だけでしょうか。代表的な歌人としては山上憶良などがいますが、「金も銀も玉もなにせむに まされる宝 子にしかめやも」という、子供を思う気持ちなどもストレートに出ています。1300年やそこらでは人間の感情は変わらないということが確認できて強く感銘をうけたのは・・・たしか小学校高学年でした。なんと早熟な子だったのかと今さらながら思います。

なお、この和歌5・7調のリズムはその後の日本人のリズムに実にしっくりきます。ためしにご存知の演歌や、または出身校の校歌などのリズムを数えると、多くが5・7調か5・7調のリズムだと思います。唐に渡った遣唐使も例外ではなく、科挙を受けて唐の玄宗の秘書長にまでなり、李白や王維といった唐の超一流の人物たちとも親しくなった阿倍仲麻呂が、故郷奈良の三笠山にのぼる月を見ながら詠んだ歌が百人一首にもあります。「天の原 ふりさけみれば 春日なる 三笠の山に いでし月かも」私も中国留学中に月を見ながら口ずさんだことがあります。

ちなみに当時の唐の都、長安は、世界中の人々が集まった国際都市で、いまでいうならさしずめニューヨークのようなものです。遣唐使に行った人たちがそこ

で目にしたのは、唐のみならず遠くシルクロードのものも多々ありました。言うならばニューヨークでジャマイカのレゲエや中南米のサルサと出会って日本に持って帰ったようなものでしょうか。アジア中のものが奈良まで運ばれたので、奈良を「シルクロードの終着点」というのもうなずけます。

外来文化の影響を受けながらも、和歌のリズムは今に至るまで脈々と受け継がれてきましたが、それを決定的にしたのが次の平安時代です。